

兼山歴史民俗資料館だより

○展示資料の紹介

12月から、地下の展示室で、戦時下の暮らしの資料を展示しています。主な資料には、召集用状箱、防空頭巾、千人針、衣料切符、水筒・弁当箱、ヘルメットなどがあります。

召集用状箱は、太平洋戦争時において、役場の職員が出発命令書を届ける際に使用したものです。



防空頭巾には、綿がたくさん入れられたものと、薄い布で作られた2種類があります。丈夫なものは家長用、薄いものはそれ以外の家族用のものだったそうです。



(兼山 故奥村富貴子氏、各務悦子氏寄贈)

資料の寄贈・寄託

○寄贈資料

平成24年4月から12月までに次の方々から貴重な資料を郷土歴史館に寄贈いただきました。

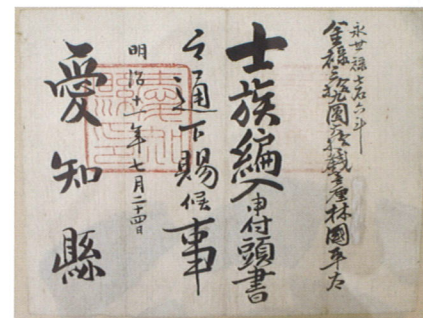
大澤勝喜、大脇兼治、奥村正、桜井孝治、高橋知久、林良三、武馬邦広、吉田利世子（敬称略）ありがとうございました。

収蔵資料の紹介

○明治11年7月付「永世禄下付状」(奥村家文書)

宛名の「林国平太」は土田村出身で、慶応4年(1868)に正気隊の一員として戊辰戦争に参加した人物です。正気隊は、土田村や古瀬村周辺の人々を中心として結成された農兵隊です。政府軍として北越の戦いに従事しました。

「永世禄」は、幕末の王政復古や戊辰戦争で活躍した人々に恩賞として、明治初期に新政府から与えられました。しかし、政府の財政改革に伴い、明治9年に廃止が決定され、同11年7月にその代替措置となる金禄公債(国債)が発行されました。



○購入資料

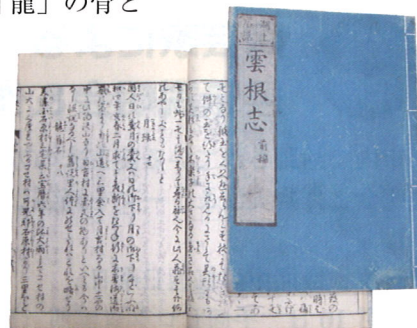
「雲根誌」(木内石亭著、安永2年刊、明治版)。

「雲根誌」は江戸時代中期の弄石家であった木内石亭が、その生涯をかけて収集した奇石についてまとめた書物です。その中には、宝暦6年(1756)頃に古瀬村(現東帷子)で山崩れがおき、その場所から「龍のかしら(頭)」の骨が出てきたことが記されています。

古瀬地区には、江戸時代に発見されたと言われているサイの顎の骨が伝わっています。「雲根誌」に記された「龍」の骨と

同じかどうか

かはわかりませんが、大変興味深い内容です。



可児郷土歴史館だより

No.22

2013.1.25

可児郷土歴史館

収蔵品紹介

可児市久々利の大平、大萱には、桃山時代から江戸時代にかけて多くの窯が築かれ、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった焼き物が生産されていたことで、全国に知られています。

今回は、黄瀬戸節竹形香炉と鼠志野草絵向付を紹介します。



黄瀬戸節竹形香炉

16世紀 口径7.8cm 高さ6.3cm

三足の香炉で、銘は「郭公」(ホトトギス)。附属品の質もよく、筒形の内箱に銀象嵌で歌が添えられている。味のある節竹形をなし、内面に施釉はない。同種の黄瀬戸香炉片が、久々利大萱の窯下窯跡から見つかっている。

鼠志野草絵向付

16世紀 口径15.5-15.7cm 高さ5.5cm

ロクロ成形後に口縁を整形する。鉄化粧を掻き落として直立した草絵を描き、長石釉を掛けて焼成する。絵柄の達筆さや作行には熟練を感じさせ、見込みの渦巻きは意図的で光っている。底部に三つの半環足が貼付され、丸いトチ痕がある。内面にも三カ所円錐ピンの目跡が残る。



可児郷土歴史館

〒509-0224 可児市久々利1644番地1

TEL 0574-64-0211 FAX 64-0238

Eメール kyodorekisikan@city.kani.lg.jp

●開館時間/午前9時～午後4時30分 ●休館日/月曜日、祝日の翌日、12月26日～1月5日

●入館料/大人310円(30名以上の団体250円)、高校生以下無料

特別展 弥七田織部展

期間 2月5日(火)～3月20日(水)

可児市久々利の大平・大萱地区には、志野や黄瀬戸、織部などを焼いた窯が点在し、戦国武将や京などの町衆の間でブームとなった美濃桃山陶の一大生産地を形成していました。その中でも、大萱に所在する弥七田古窯は、俗に「弥七田織部」と呼ばれる洗練された意匠の織部を焼いた窯として知られています。他の織部とは一線を画した弥七田織部の世界をご堪能ください。

弥七田窯跡

弥七田窯跡は、本格的な発掘は行われていないため、窯の操業期間や規模などの詳細については不明です。伝世品や採集された陶片などから、大萱古窯群の中で唯一連房式登り窯であり、織部を焼いた窯の中でも、その最盛期が過ぎた頃(元和から寛永期)に操業したとされています。

また、弥七田窯の名称は、調査に訪れた荒川豊蔵が窯跡近くの田の名前からつけたものです。

主な展示品

○伝世品

黒織部茶碗、織部水指、鉢、皿、向付など約50点を展示します。普段なかなか見ることができない愛知県や岐阜県内の各博物館、あるいは個人所蔵の弥七田織部を一堂に会します。

○陶片

弥七田窯跡出土の陶片(約290点)を展示します。弥七田織部独特の形や技法、さまざまな図柄、色調など、その繊細さと優美さは圧巻です。また、陶片の図柄と伝世品を比較することによって、弥七田窯で作られたものであることがわかります。



関連企画 陶芸家による 展示説明会&作陶実演

市内で活躍されている陶芸家の方々による展示説明会と作陶実演&トークを開催します。

- 日程 会期中の毎週日曜日
 - 2月10日 手回しロクロ実演(原憲司氏)
 - 17日 展示説明会(吉田喜彦氏)
 - 24日 展示説明会(吉田喜彦氏)
 - 3月3日 型起し成形実演(瀧口喜兵衛氏)
 - 10日 展示説明会(加藤弥右衛門氏)
 - 17日 展示説明会(瀧口喜兵衛氏)
- 時間 各日とも13:00～
- 申込不要 ご自由に参加下さい
- 場所 可児郷土歴史館 (可児陶芸協会協力)

陶芸苑だより

作陶を支える技 ～けずりと道具～

陶芸苑では、社会人や親子を対象にし、午前・午後・夜間・夏休みと開催日や時間に配慮して陶芸教室や講座を開催しています。ロクロ・タタラなどで、思い思いの作品をつくることができます。陶芸苑の教室・講座に何度も参加され、陶芸技を磨かれる方が増えています。

陶芸苑では、「五斗蒔」と呼ぶ白粘土を使って作陶します。適度に柔らかく成形も容易で、1200度での焼成において釉薬との相性も適した粘土です。ロクロによる成形も重要な作業ですが、半乾きとなった粘土作品をさらに美しく仕上げる「けずり」は最も大切な工程です。様々な道具を常備しています。土を削るカンナによって、あたかも粘土のぜい肉が落とされていくかのように、見事な造形が生み出されていきます。

ロクロの回転を巧みに利用し、道具を駆使しての作陶は技の結晶体です。鉄製のけずり道具は細くなったり短くなったりしていますが、それは長年にわたって使われてきた証です。けずりの技も、数ある道具を選び自在に扱えるまでの試行錯誤を繰り返すことで磨かれていくものです。

窯出しは、独自の技がうまくいったかどうか確かめる瞬間です。多くの方は、微笑みながら大事そうに袋に入れて家路へと急がれます。つくり、使う楽しみが味わえるのが陶芸です。

